

國學院大學學術情報リポジトリ

Book review : Masaaki Tatsumi Editor in Chief, Ayumi Ohtani, Chisako Ohtsuka, Asami Ono, Chiemi Katoh , Saki Shingu, Miciyo Suzuki, Toshiyuki Takahashi, Sachie Muroya, and Jun Mori writer, "Annotated Songs of the Kojiki : An Overview of Ancient Songs Explicated via a Theory of Song"

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Cao, Yongmei メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000078 |

〔書評〕

辰巳正明監修、大谷歩、大塚千紗子、小野諒巳、加藤千絵美、神宮咲希、
鈴木道代、高橋俊之、室屋幸恵、森淳著

『古事記歌謡注釈 歌謡の理論から読み解く古代歌謡の全貌』

曹 咏梅

本書は、歌を大歌と小歌に分類する歌謡理論に基づいて、古事記の歌謡を神話や物語から切り離して、歌謡の内部が持つ現在の性質に注目して、注を施し解説を行った革新的な古事記歌謡の注釈書である。まずは目次の部分を以下にあげる。

- 解題 i 民族の歌謡／ii 歌謡の分類／iii 大歌の性格／iv 小歌の性格／v 古事記の歌謡／vi 古事記歌謡の歌体／vii 古事記歌謡の特色／viii 本書の方法／凡例／古事記歌謡注釈 古事記―上巻、古事記―中巻、古事記―下巻／後書

き／本文校訂表（校異）／古事記歌謡語句索引／著者略歴

本書の解題には、本書が用いた歌謡の分類理論や研究の方法、目的などが述べられている。歌は歌われるものとして文字文化と関わりなく集団の中に存在し、集団的な歌の共有のほかに、個人が共有する歌も歌い継がれたことを説く。本書では、「うた」を大歌と小歌に分類し、「大歌＝公的儀礼歌―民族の歴史に関わる歌―祭祀・迎客」、「小歌＝私的恋愛歌―男女の社交に関わる歌―歌会・労働等」と説明し、さらに歌い方や曲調の

種類、楽器の有無などが加わるともつと複雑になるという。古代日本において、大歌は雅楽寮とは別に、大歌所の前身「歌舞所」に管理されたと思われ、大歌と小歌の分類方法は古代の歌舞所以来の考えによるものであると理解される。大歌にしても小歌にしても、古代歌謡には多くの恋愛歌が中心となって展開し、中国京族の歌謡の性格からみれば、娯神情歌、文娛情歌、社交情歌、恋人情歌、愛情故事歌、失愛情歌のように分類できるとし、このような分類は古代の歌謡を考えるのに重要な歌謡理論であるという。

歌を大歌と小歌に分類する方法は早くに折口信夫氏によって指摘され、折口氏は宮廷の歌、公の歌を大歌とし、公の歌に対して民間の歌を小歌と説いている。折口氏がいう大歌は主に宮廷歌謡を指すものであるが、本書では歴史上に国や朝廷がなかった中国の少数民族に大歌が存在することを参考とし、大歌は「宮廷に関わらずに公式の場の歌」であると明確な立場を示している。

一方の小歌は、歌垣や市、遊楽の場、労働の場に歌われた男女の恋歌が中心であり、そこには歌を歌うための順序や歌唱方法が存在し、個々にテーマがあり、それをシリーズ（主題を共通とした連作）として歌うという。ここでいうテーママヤシリーズ

ズは辰巳氏が提唱した「歌路」や「歌流れ」のことである。本書であげたテーマは次のようになる。試喉の歌、初逢の歌、問名の歌、問村の歌、質問の歌、探情の歌、賛美の歌、初恋の歌、相思の歌、熱愛の歌、定情の歌、約束の歌、共寝の歌、鶏鳴の歌、怨恨の歌、悔恨の歌、分離の歌、逃婚の歌、情死の歌。

歌は国や民族に関係なく、どの民族にも歌が歌われて来た歴史がある。歌は歌われるものとして文字文化に関係なく集団の中に存在していた。歌が集団性を持ちながら発生し伝承されることは、文字を持たなかった中国少数民族の歌文化を見れば首肯されることであり、文字以前の古代日本や中国にも同様な状況が予想される。その歌われた歌がある時期に宮廷によって採集され、宮廷の音楽機関によって管理されることで、後に青史に残ることとなったであろう。日本の古代歌謡も中国の古代歌謡もこうした道を辿り、今われわれが目にすることができるのである。だが、こうした記録に残された歌謡は歌謡本来の性格とは別に、意味づけがなされたり解釈されがちである。中国の古代歌謡の『詩経』の場合は長い間政治的な意味が加えられ儒教的な解釈がなされて、歌謡の本来の姿が埋没された歴史がある。古事記歌謡の場合も同様に、物語の中の一部としてあ

り、歌謡本来の性格についての研究が進んでいるとはいえない。古事記歌謡の研究は古事記の作品研究と同時に扱われたり、または歌謡だけを取り出して記紀歌謡として研究されてきた。本書にも挙げた通り、記紀歌謡の注釈・研究は江戸時代からなされて今にいたるわけであるが、歌は物語の人物によつて歌われたと考えられたり、物語に見える歌謡として説明されてきた。その中で、土橋寛氏の、記紀歌謡を古代歌謡と捉えて、記紀の歌謡を分類して、歌の性格、歌の場の問題などを考察した点は記紀歌謡の研究を大きく前進させたといえる。歌謡研究における土橋寛氏の功績はいうまでもないが、その歌の分類や歌の解釈を所伝との関係から説く場合も多く、説明しきれない部分がある。

歌の本来の性格を解明するためには、文字で記された文献から一旦解放させる必要がある。『詩経』の歌謡なら詩序や古くからの注釈から、古事記の歌謡なら神話や物語から切り離さなければならぬ。それから歌謡の表現にこだわり、そこから歌の性質や歌の場、歌の機能などを明らかにしていく作業が必要であろう。そして非文字社会に生きた中国少数民族の歌世界は、歌謡研究にいろいろな情報を与えてくれ、古代の歌の研究には非常にいい材料である。こうした研究方法論をすべて取り込

んで成し遂げたのが、本書である。そういう意味から本書は、画期的な注釈書であるといえる。

本書の注釈は、訓読文・漢字本文・現代語訳・歌謡注釈・諸説・解説の順に行われている。解説は基本的に大歌系統の歌か、小歌系統の歌か、どのような場で歌われたか、なぜ歌われたかなどについて述べられている。たとえば短歌体恋歌の場合には、歌垣のどの段階の歌であるとか、長歌体の恋歌の場合には、大歌として伝承される恋愛故事の一齣である、といった解説がなされている。歌を大歌と小歌に分類する歌謡理論は、歌の公的、私的の性格や歌が歌われる場、歌の機能性、歌の特徴などを簡明直截に表していると思われる、歌謡の研究においては非常に有効的であると考える。本書は古事記作品の研究ではなく、古事記歌謡の注釈であり、古代歌謡の研究である。本書の刊行は、古代歌謡の研究が一つの転換点を迎えたことを意味するだろう。

解説で中国少数民族の風習や歌を引用して説明しているが、執筆者によつて民族の名称がはつきり書かれたものもあれば、「中国の民族」と表す場合もあつて統一されていないのが少し残念に思う。また個人的には、地方の歌が宮廷の歌所に移入され管理された時に歌の性質などの変化はなかったのか、宮廷の

歌所の歌人が制作した歌はなかったのか、など疑問に思ったところである。それからやはりなぜこの歌がこの物語に採択されたか、次は歌と物語の整合性についての研究が期待される。

本書は辰巳氏のご指導の下で大学院生と兼任講師による共同研究の成果である。執筆者の方々には、ここで学んだ研究理論や研究方法を生かして、今後古代歌謡や古事記の研究に新しい風を巻き起こしてくれることを期待したい。

(A5判、二八五頁、新典社、二〇一四年三月発行、定価二六〇〇円＋税)